

里づくりテーマ：コミュニティカレッジたそがれ

有機農業や自然栽培の技術を活用した多世代交流と次世代育成のためのコミュニティファーム運営や多様な学びのためのプラットフォームづくり。

- 県内外の大学生らと、地域に伝わる知恵の継承など自然との共生を目指した学びのコミュニティづくり。
- 持続的な農山村のあり方や農的暮らしの価値を模索し、農的学びのプログラム開発（伝統野菜の加工や商品化、手しごとと技術の継承など）
- 有機栽培の普及推進やSDGs目標の達成に寄与しつつ付加価値のある農業の創出と次世代の担い手育成の拠点と交流の拠点づくり

【今ある地域資源】

- 【人的資源】子ども、おじいさん、おばあさん、農業の先輩方、土地改良区や自治会などの共同体
- 【自然資源】山、川、土、田んぼ、畑、野山のいきもの、山菜、野草、森林など
- 【技術資源】有機栽培、田園景観、伝統野菜（沼山大根、てんこ小豆など）てしごと（琴川のすげ傘、草木染め、しめ飾り）伝統食（笹巻き、味噌作り、餅作り）種採り技術、コンポスト技術など

現在の地域状況

- 人口減少・高齢化による担い手減少や耕作放棄地の増加。
- 農地や周辺環境の維持管理についてのビジョンが不透明。
- 地域共同体の存続から農村景観の維持、自然災害への防衛機能等、衰退の一途を辿る中山間地域の共同体の再生には、多様な人々の交流による発想の転換（インパクト）が必要。
- 2009年から有機栽培（自然栽培）の技術を取り入れ、安全性の高い作物をつくるための技術向上や環境負荷低減などの観点からとして地域のブランディングを図ってきた。
- 「たそがれ野育園」の運営によって、当地域と消費者・都市居住者との積極的な交流の機会を図ってきた。農体験プログラムへの参加者が年々増えつつあり、体験施設（設備）の充実、交流拠点の整備など質の高い農的サービスが求められている。
- 潟上市の「農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する計画」では、当地域（飯田川和田妹川地域）における目標として「地球温暖化防止や生物多様性保全といった環境と調和する農業の促進を図る」と定められており、地域一体となったさらなる取り組み強化が求められている。

【里づくり計画】計画策定・拠点整備・活動支援

＜計画策定＞

- 地域住民や都市住民を含む事業組織「たそがれ野育園運営協議会」のメンバーを中心に、地域のなかで目指すべきビジョンについて土地改良区をはじめ地域内各種団体、地域住民との意見交換を行い、地域における活動の役割について具体的な計画策定を行う。

＜拠点整備＞

- 学びと交流の拠点づくり（民家リノベーション）
交流拠点として築約60年民家の一部をリノベーションする。場所への愛着を持ってもらい、自分たちの活動の場と思ってもらえるようワークショップやセルフビルドなどの要素を取り入れたプロジェクト進行を採用し「みんなの田舎」を目指す。

＜活動支援＞

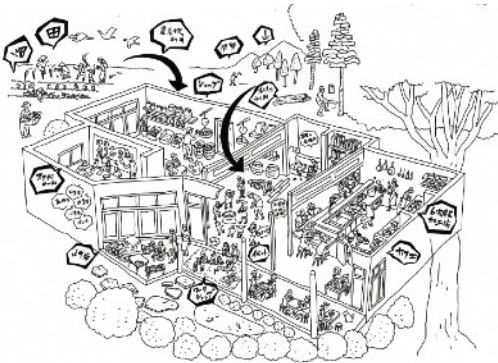
- 多世代、多地域の人が交わる空間
畑から収穫してきた野菜の調理、加工商品開発、手仕事のできる土間、居心地のよいカフェスペース、情報をストックするショップコーナー、トークイベントができるようなフリースペースなどの多機能を持つ空間から多種多様な連携を生む様な展開を考える。
- 協力者（連携団体）である「You&Iー結いー」に参加する学生たちやこれまで長期での関わりのある早稲田大学「大隈塾ストーンスープ」などの学生グループと連携し、若い世代の交流の核とする。

魅力ある里づくりの構想（目標）

◇米作りや、野菜作りのほか加工調理体験、伝統食体験、てしごと体験など、一年を通じて農に触れられる拠点となり、カフェスペースやショップコーナーやシェアキッチン、チャレンジファームなどのプログラムを整備して次世代がこの地域で暮らしたいと思ってもらえるような「共創型コミュニティ」を目指す。また有機農業推進の起点となる可能性もある。

＜事業効果＞
単なる関係人口の増加を目指すのではなく高解像度の関係づくりを目指す。

	現在	事業完了後(R5年)
交流人口 (学生参加者)	100人 (20人)	200人 (100人)
農体験収入	1,000,000円	2,500,000円
加工品等販売額	200,000円	500,000円
レンタルスペース収入	-	200,000円
カフェ収入	-	300,000円



古民家リノベーション



コミュニティファーム運営



伝統食・加工食体験



コミュニティによる営農モデル



一次産業連携と商品開発